

令和3年度 「東国文化自由研究」

今の衣生活を東国文化からみつけた

高崎市立群馬中央中学校

1年 5組 4番

氏名 伊藤 さな

提出日 令和3年8月23日

1. はじめに

今回、東国文化を調べ進めていったところ、縄文時代から奈良時代ということが分かった。かみつけの里などを代表に現在は金堂と塔の基壇や築垣が復元され、当時のスケール感を感じることができる。また、「上野国分寺まつり」というものがあり、そこでは天平時代の衣装を再現した 200 名以上の壮麗な行列と儀式が行われ、日本の歴史上でも特にグローバルさや優美さを誇った天平文化の華やかさを再現していると知った。また、聖武天皇と光明皇后の衣装も再現された年もあったりと毎年新しい試みが行われ行列を率いるということの魅力を感じた。

また、年によって違いはあるが来場者には天平衣装の着付け体験や、野外ステージでは私が通っている群馬中央中学校演劇部による歴史劇「上野国分寺物語」の上演があったりと、古代天平ロマンをたくさん味わえる一日がある。また国府の特産がたっぷり詰まった“国府鍋”のふるまいや国府白菜、国府人参などが登場する屋台村で地元グルメも楽しめること知り、こんなにも身近で人にとって大切な歴史的衣食住が体験でき学べることを知って、東国文化の衣食住を調べたいと思った。

そこで今回私が一番注目したのが、衣装である。それは、私が通っている中学校では、制服で女子にもスラックス（ズボン）が今年からできた。「スカートだけでもいいのに」「別にいらないな」などと思い、とても驚いた出来事だった。近年話題となっている LGBTQ の問題等を考慮して今年から女子生徒の制服のレパトリーが増えている学校が多い事をニュースで知り疑問が解けた。色についても、幼児期はピンクや赤は女の子色となんとなく思っていた。母からよく聞いた「赤い靴」という歌を思い出す。今では男女ともいろいろな色を身に付けたりしているので関係ない。色々が時代と共に変化することを実感した。また、私が歴史を学んできて男女の違いが今より大きくあったのだということも感じていたので、衣装がどのように変化していったのか自分なりに考察したいと思った。

現代の制服

・男性の制服

スラックス

・女性の制服

スカートだけでなくスラックスや
キュロットが選べるようになった



現在の制服や私服、いろいろな形や生地で売られている。昔は、ズボンをはいていると男の子？と言われた時代もあったと祖母から聞いている。昔は女性はズボンを履かなかったのか、男性はスカートを履かなかったのか、髪型やアクセサリは・・・衣生活はどんなだったのかなど、様々な疑問が浮かんできた。

2. 調査方法や内容

東国文化の衣生活を知るためには、日本の歴史的背景を通してどのような服を着ていたのかを調べた。何か今の服につながるものが見えてくるものがあるのではないか。

まずは時代(年代)でどのような出来事があったのかを確認し、並行してその頃の技術(土偶や埴輪・衣服)や流行・世界情勢をみながらどう日本の衣服が変化していったのか調査してみた。

調べ方としては、

- ・学校の教科書や歴史の本・図書館へ本を借りた
- ・博物館に足を運び資料集めや学芸員さんに疑問を聞いた
- ・身近な人へ疑問を質問をした
- ・インターネットで検索した

上記4点で進めた

<古代のファッション(旧石器時代～奈良時代)>

○旧石器時代

- ・衣服材料としてシカなどの動物の毛皮

○縄文時代(～3世紀)・・・日本原住民の文化

- ・衣服材料として狩猟で得た獣皮・鳥類の羽毛・魚皮・植物
- ・縄文晩期には布目痕土器片・植物韌皮繊維の編布断片が出土
(越後アングインが縄文時代の編布を今に伝えている)
- ・まじない・装飾として貝輪(カイワ)・耳輪・首飾り・ペンダント
- ・青森県三内丸山遺跡より骨・エイの尾で作られた縫い針 100 本以上出土



○弥生時代(～4世紀)・・・新文化の伝播

(新しい文化を持つ他国の多くの人々が入り、新技術をもたらした)

・織機の木杵・布断片の出土・銅鐸や土器片などに線刻された貫頭衣の衣装「魏志倭人伝」に記された3世紀の日本風俗

・倭人は皆、裸足で男子は大人も子供も顔面・身体に入墨をし、其身体に赤土を塗る頭は髪を束ね、かぶりものでなく麻などで包むか、楮などの植物繊維で結んでいる

・横幅衣(オオフクイ)・・・男子の服装は長方形の布を縫わずに肩にかけて前で結び、もう1枚は腰に巻いて結ぶ

・貫頭衣(カントウイ)・・・女子は長方形の布の中央に穴をあけ、頭を通して着る髪は束ねている

横幅衣・貫頭衣→



・繊維の材料は紵麻・楮・藤・葛の韌皮繊維絹も3世紀には単純な文様織物を産出していた 邪馬台国の卑弥呼が魏より絹織物・鏡 100 枚与えられた。

○古墳時代(4世紀～6世紀末)・・・大和朝廷による日本統一された時代

- ・大和朝廷の国内統一の結果、470年代中国・朝鮮からの多くの帰化人によって、高度の養蚕製糸、機織の技術が導入され、貴族たちは大陸の服飾を模倣し始めた
- ・民間から朝廷への租税として、麻布・絹・アシギヌ・倭錦の織物が納められ始める
- ・服装・生活様式は土偶・埴輪に見られるが、古墳被葬者は支配階級層で権威の象徴
- ・前開きの衣服が新しく執り入れられた

- ・左衽2部式の服装は北方騎馬民族の胡服（ペルシャ服）に同じ
- ・彼等の衣服は世界中に広まり洋服のルーツになる（右衽の埴輪も出土）
- ・衣（上着）は男女共、筒袖・腰丈・上領（丸首）
- ・左衽の打ち合わせ・胸紐で結ぶ（右衽も多く出土）
- ・男子像は衣禪（キヌハカマ）
- ・禪はゆったりとしたズボン風で膝のところを足結の紐で結んでいる
- ・頭は結髪 みずらや鉢巻風の冠りものをしているのもある
- ・装身具として玉で造られた首飾・耳飾り・指輪
- ・釧（クシロ）の腕輪・まよけとして櫛を挿す
- ・女子像は衣裳（キヌモ）ロングの巻きスカート状の裳をまとう
- ・頭上には種々の形の髷を結う
- ・巫女の埴輪から倭分布（シヅリ）の帯をしたり、襷（タスキ）を肩から掛けている



- 飛鳥時代（593年～710年）・・・中国風と韓国風（特に高句麗風）が混和
- 603年・・・推古天皇11年に我が国最初の服制である冠位十二階が制定された
- ・服装で身分を表わす。古墳時代の衣装を継承。中宮寺・天寿国曼荼羅繡帳
- 622年・・・古墳時代の衣装を継承する衣・男女共禪や裳と上衣の間の襞のような短い裳・ヒラミ（腰衣）
- ・男性→上着とズボンの裾に色違いの布で縁取る 襷（ラン）という冠・・・上着と同色
 - ・女性→裳・・・プリーツのスカート状
衣袋・・・現代のショルダーバッグ
- 608年・・・隋の正使の服装は右衽であった中国では「人道者以右為尊（人の道は右を以って尊し。となす）」との思想のもとに右衽
- 645年・・・唐で流行している服装様式を採用し始めた
- 647年・・・大化3年 7色13階
- 649年・・・大化5年 19階 服制による古墳の製作年代は7世紀末～8世紀初頃と判断
- 664年・・・天智3年 26階
- 天武・持統朝の衣服・・・大幅な服飾の改変・位階は皇族と臣下の位をはっきり区別し古い習慣を禁じ唐風にしようとした
- 682年・・・位冠が禁止され冠は黒一色（漆紗冠）
- ・位による文様の大きさも定められた・男女とも結髪
 - ・領巾（ヒレ）・前裳の禁制・左衽 男女共 襟は左衽 男性の服装（朝服）
袍の色相から701年以前のもの 白袴・黒の漆紗冠
 - 女官の服装（朝服）・・・690～701年当時の衣装



- ・髪は後頭部に垂れた部分をはね上げるようにして白い紐で束ねる
- ・衿はとんぼ頭と長紐で結ぶ（結紐）の2通り
- ・長い襞のある裳・裾にフリル
- ・色々の台形の布を縫い合わせた巻きスカート
- ・細い腰紐を蝶結び ・手に翳（サシバ）
- ・袖口や上衣の裾回りから內衣を出す ・団扇

高松塚古墳壁画に描かれた人物像
当時の服制が朝鮮風から唐風に
移行していく過渡期

☆身分で決められた色目があった 年代別☆

推古天皇朝の衣裳・冠位十二階（608年）

官位名称	大徳	小徳	大仁	小仁	大礼	小礼	大信	小信	大義	小義	大智	小智
色彩												
色彩名称	濃紫	薄紫	濃青	薄青	濃赤	薄赤	濃黄	薄黄	濃白	薄白	濃黒	薄黒

天武天皇朝の衣裳（685年・48階）

官位名称	親王明位	諸王浄位	臣正位	臣直位	臣勳位	臣務位	臣追位	臣進位
色彩								
色彩名称	朱華	朱華	深紫	浅紫	深緑	浅緑	深葡萄	浅葡萄

持統天皇朝の衣裳（690年・60階）

官位等級	1~4	5~8	9~12	13~20	21~28	29~36	37~44	45~52	53~60
官位名称	親王明位	諸王浄位	諸王浄位	臣下正位	臣下直位	臣下勳位	臣下務位	臣下追位	臣下進位
色彩									
色彩名称	朱華	朱華	黒紫	赤紫	緋	深緑	浅緑	深縹	浅縹

養老2年服制（718年）

官位名称	臣1位	臣2・3	臣4位	臣5位	臣6位	臣7位	臣8位	初位
色彩								
色彩名称	黒紫	紫	深緋	浅緋	深緑	浅緑	深縹	浅縹

○奈良時代（710年～794年）・・・（奈良時代およその人口 約5百万人、平城京の人口は10万人、平城宮に働く人は1万人、五位以上の貴族は130～150人、三位以上になると10数人）

701年・・・大宝律令

708・712年・・・衣の袖口と身幅の細狭を禁じ、袖口の寸法を八寸以上一尺以下と定める

718年・・・養老令の制定

719年・・・衣服を右衽に改められる 「天下百姓右襟」と発令

723年・・・衣冠の制に違反する形式の乱れと染織の奢侈が戒められた

770年・・・用尺を追加する袍を戒め、袖口の広さを五位以上は一尺以内、六位以下は八寸以内と制限した

783年・・・驕奢の傾向はその後も止まず、女官たちの服色の乱れと貴賤の別なく禁色を着る事が正された

833年・・・令義解（養老律令の注釈書）より唐風様式を模倣し、唐文化一色の時代

901～923年・・・令集解 礼服・朝服・制服の服制が定まった

・服装については大宝律令の中の衣服令で細かく決められていた。それは身分や位の違いによって公服を、礼服・朝服・制服に分けて規定された。

これが後の基本法になり実効は平安時代初期まで続くことになった。

当時布も税として納められ、主に絹織物と麻布。

・木綿は室町時代後期から普及する繊維で、奈良時代にはなかった。布といえば麻布を指す。又、反物の幅や長さにも細かい制約があり、麻布の中は71～74cm

・絹は50～56cmと決められていた。

・麻布の原料植物は主に大麻と苧麻

大麻・・・一年草のクワ科 茎は直立し、2.5m内外 掌状の葉

苧麻・・・イラクサ科の宿根性多年生植物(カラムシとも呼ばれる)で原野に自生、丈は1～1.5m 桜葉と酷似、布の大半はこの苧麻の繊維



<男性衣装>

男性貴族、朝服と呼ばれる宮廷での公事の時に着用する衣装。身分の高い順（色は位階で決められている。）素材は絹。腰につけているアクセサリも身分の高い人ほど多く付ける。貴族は5位まで、帝と直接お話し出来るのは3位まで。

2位から3位 4位 6位 7位 8位



袴は赤袴+白袴 白い袴のみ

けち染め



浄衣（無位で現在の公務員の制服にあたる）破れたり汚れて着れなくなったら、返却させられた。このことから正倉院には返却された浄衣が多く伝存している。



←正倉院に伝存する麻こう

手に持っているのは笏

本来笏は木で、行事などの時のメモ帳にしていた。終われば刀子で削って又使用したとの説がある。

しかし後には貴族の威儀を示す儀具となった。

<アクセサリ>



佩飾品（アクセサリ） 刀子（トウス）

今でいうストラップの数々

- ① 珊瑚
- ② 琥珀に絹組紐（プラスチックの玉に化繊紐）
- ③ 刀子（トウス）・・・小がたなのこと 木杓・木簡の字を削って書き直すのに必需品
土台・割りばしに宝相華文のペーパーを巻く
- ④ 珊瑚土台・マドラーに赤石のプレスレットを貼る
トルコ石土台割りばしに青石の //
- ⑤ 水晶玉6個・組紐のネット（ビー玉を綿糸ネットに）
- ⑥ 珊瑚管（マカロニに赤マジックで色づけ）
- ⑦ 琥珀の魚型（厚紙重ね張りでポリュウム）
- ⑧ 水晶勾玉



↑金具の飾りが付いた革ベルト



笏（長さが1尺から）

象牙 木5位まで 6位以

<女性衣装>

女性朝服（宮廷で公事の時に着用する貴族の婦人や内命婦）

美しく着飾った女性貴族や宮廷で働く身分のある、内命婦は今でいうキャリアウーマンの女性たち。

身分で決められた色目、それより低い色目は自由に楽しんだ。

素材は絹。



今の巻きスカートと同じ
赤・緑・紫の台形の細長い帯状の布を
継なぎ合せて縦縞に今のパッチワーク
と同じ

翳（さしば）
高貴な婦人は人前では素
顔を見せ
ないためこの翳で自分の
顔を隠した

3. 調査結果と考察

<調査結果>

○土偶・埴輪

土偶は女性。埴輪は人間（男女）と動物がある。

土偶は女性しかないことから、縄文時代は女性が強かったという説がある。

人物埴輪には立派な服装の男女のほか、武人・文人や巫女・狩人・楽人・力士・農民など、さまざまな職業の区別があり、身に着けている服装や持ち物などで、当時の社会における役割の違いが表現されていた。もちろん、さまざまな儀式においても役割の分担があった。



○衣服

古墳時代の人々の服装は上着と、男子がズボン、女子はスカートが基本。弥生時代の貫頭衣と呼ばれるワンピースに比べ、現在と同じツーピースである。このような服装は、中国西方（中央アジア）の胡族と呼ばれる遊牧騎馬民族の服装、胡服と呼ぶ。が中国・朝鮮半島を経て伝えられた。

一方、頭や首、胸・腕・腰にはさまざまな冠・帽子や装身具をはじめとして、武器や仕事の道具などさまざまな持ち物を身に着けて表現され、髪の毛は男女いずれも長髪で、男子が美豆良と呼ばれる顔の左右で振り分ける髪型、女子が頭の上で前後に分けて束ねた髪型をしていた。

↓縄文時代

↓弥生時代

↓古墳時代

↓飛鳥・奈良時代



↑古墳時代

衣・裳姿

↑飛鳥・奈良時代

衣・背子・裙姿

↑平安時代

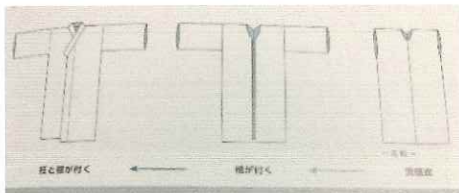
五衣唐衣裳装束・五節舞姫装束

・形状について

日本の服装において美が始まった時期は分からないが、遅くても弥生時代から古墳時代頃には、色彩や模様によって衣服を飾ることが行われていた。これは、原始時代以来の呪術的機能や集団生活を行ううえで識別機能も大きく担っていた。

縄文時代頃には、2枚の布を縫い合わせ、首の部分だけ縫わずにそこから首をだしたものだ。この貫頭衣は、体より少し幅が広いものだったので縄の紐を腰にまけば体に固定することができ、両脇も縫えば体温保持にも適すようになる。やがて枝などとの接触から腕を守るために、筒状の袖を付けるようになった。袖を付けると、脱着がしにくくなるので、体の前の部分の縫い合わせを解いている。寒い時期には、前が空いていると風が入って体温が奪われる。その対策として、前身部分が重なり合うようになり、首周りの保護と防寒のために襟がつけられた。

身分の格差が表れ始めた古墳時代だったが、それ以前と同様に活動的な生活をしていたので腕が自由に動く筒袖だった。古代における衣服のスタンダードな形になり、「衣」と呼んだ。これを後に「小袖」と呼ばれるようになり、日本の衣服の出発点が貫頭衣にある。



↑

貫頭衣から小袖へ

・色について

飛鳥・奈良時代は、位を服の色で分け見たらすぐに身分が分かるようになっていた。紫は常に上位にあり高貴な色であった。上位の方は鮮やかな色が多い。色合いが派手だった。

<考察>

縄文時代から古墳時代は、土偶や埴輪から衣服が想像されている。見方によっては、今言われているものとは違っている可能性もあるのではないかと考える。例えば、教科書によると弥生時代では、男子はお坊さんの袈裟のような袈裟衣、女子は戦後の女性が着ていた単衣のような貫頭衣だった、としているが、違う風にもとらえることができるのではないだろうか。

まず袖を縫い付けた上衣が出土している。さらに古墳時代の埴輪を見ると、袈裟衣は女性、ことに巫女の衣服に見える。

埴輪の衣装を見ると、男女ともに上衣は同じで、筒袖で前開きのワイシャツ状のものを着ているが、襟はない。下衣については男子はズボン、女子はスカートを履いている。埴輪からみて、弥生人は男女ともに襟のないワイシャツ風の上衣を着ていたとみえた。

縄文時代の女性をかたどった土偶も同じような上衣を着ていた。下衣は、男子はズボンであろう。女性は、貴婦人風の埴輪は、織布を縦にしたスカートを着けている。巫女とみられる埴輪は、上衣の袈裟衣のみで、下衣は表現されていない。下半身を露出しているものもある。

過去の中国からの影響を考えるとジーヌオ族などを見ると、織り上げた布を横向きに腰に巻き付けた巻きスカートを身に着けている。それを描写すると、倭人伝の男子の衣服になると思った。その巻きスカートは、かつてはミニスカートだったのではないだろうか。これからみても、弥生時代の女性は巻きタイプのミニスカートだった可能性も考えられる。

また、今の和服は中国の呉地方の衣服が古墳時代に伝わり、以後、独自の進化を遂げて現在のようになった。「呉服」の名称は、その名残であることを考えると、呉服は中国服を意味するのではないだろうか。

調べて続け、歴史的に世界から影響を受けていることから考えると、これらの事があってもおかしくないことが分かった。発掘された呉の衣服をみると、まさに呉服を着ており、げたを履いていた。弥生の衣服にも同じような現象があったのだろう。

文化は広い視野で見る必要がある。

そして、東国文化における衣服の調べを進めていくうちに、時代と主に改良を重ね日本独自の文化を作り今の制服や服があるとわかった。制服は、生地がしっかりして動きやすい着心地のいい形に収まっている。また、過去には身分による色目があった時代もあるが、その時代には使われなかった色彩で色々な面で影響を及ぼさないであろう色を制服に取り入れているのではないか。紫は欲求不満な色と聞いたこともあるが高貴な色と聞いたこともある、年代別に色を見てみると上位にある色だったので由来が分かった。色へのイメージは数多くあるは、ただ人が勝って言っているのではなくしっかりと意味があることが分かった。

土偶や埴輪などを通して今を形で残すことの大切さを感じた。また、昔の人々が生活がしやすいよう工夫してくれたので、今の生きやすさがあるのだということも分かった。伝統が受け継がれていることで、過去とのつながりを感じる事が出来る。

今まで世界からの影響をうけていると考え、男女関係なくスラックスとスカートがあり選択できるようになったのは自然な流れだと考える。

今後、今回調べた時代以降についても調べれば、これからどうなっていくのか予測することが出来るのではないかと考えた。

<感想>

今回の研究を行ってみて、大昔の事について資料が少なく調べてもその時代を想像することに苦労した。また、今は使われていない言葉がたくさんあり、読めない漢字や何を意味している言葉なのか調べることが大変で、分からないことを調べていたら資料が多くなってしまったのでどの部分を使って書くか決めるのが難しかった。色々調べてみるとどんなことを言っているのかなど分かってくるものの、男性と女性の着る服の名所が違ったり、時代ごとに服の材料が違ったり、女性は顔を隠して過ごしていたことはなぜなんだろうと疑問も増え、頭の中でごちゃごちゃになってしまうこともあった。驚いたことは、人口が今と比べ物にならないくらい少ないことや、時代と共に美にこだわりがでてきて重ね着が多く生活できないのではということ、服の長さや広さを位ごとに決められていて今よりも衣装について厳しかったことである。また、アクセサリも和風もあれば洋風もあり統一性の無さは意外だった。

今の服の形は主に縄文時代や弥生時代からきていて、古墳時代や飛鳥時代の衣装は今はあまりに使われていない、衣服令という命令によって身分やくらいの違いで服を分けられているのは差別ではないかと思った。差別はしてはいけないことなので、今の制服の在り方はよかったと思う。男性も選択枠が増えるともっといいなと思った。

調べていく中で博物館や古墳が再現されている場所を歩いて見たり、その近くにある土偶や埴輪に囲まれ同じ形になってみたり、五感を使ってタイムスリップし楽しく学ぶことが出来た。初めての事が多く、バーチャル博物館を体験した時は、進化を感じた。頭だけでなく体も使って学びをすることが出来てよかった。

そして、自分なりに細かいところまで調べられたのではないかと思う。歴史の事をこんなにも細かく調べたことはなく、一つの事に興味を持つと関わっている周りの事も自然とついてきて知識が増えることもわかり、永遠に終わりが無いなと思った。それは私が大好きな自然・木に似ていることが連想され嬉しくなった。

また、人は常に生きやすいように工夫して生活する力があるのだと思い、これから自分が生きていくうえで大切な気持ちや考えを学ぶことが出来た。

今後は、毎日着る服だからこそ着心地の良さを感じながら着たり、追求して服選びをしてみようと思う。

引用・参考文献

- ・『東国文化副読本～古代ぐんまを探検しよう～』群馬県 2019
- ・『日本の装束 解剖図巻』株式会社エクснаレッジ 2021
- ・『有職装束大全』平凡社 2018
- ・『女性の服装 1500年』公益社団法人京都染織文化協会 2021
- ・『日本の歴史』全巻 角川まんが学習シリーズ 2018
- ・『新しい社会・歴史』東京書籍
- ・『パーフェクトサマー 社会 地理 1・歴史 1』株式会社学宝
- ・『王の儀式』『information』『古墳ハカセになろう』かみつけの里博物館
- ・『バーチャル日本博（江戸東京博物館特別展）』文化庁・日本芸術文化復興会 2021
<https://japanculturalexpo.bunka.go.jp/vp/>